

《調査報告》

二〇一九年度モンゴル国突厥関連遺跡調査箇記

鈴木宏節

はじめに

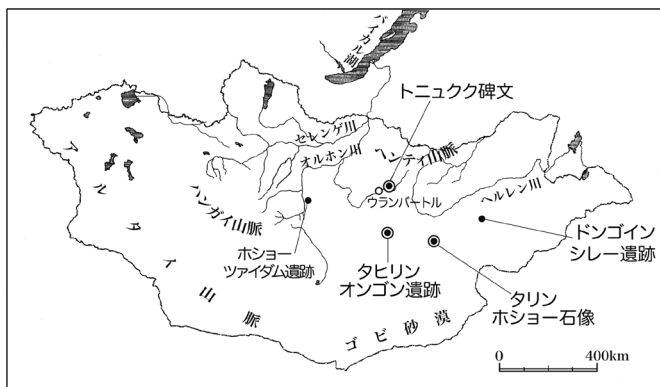
突厥とは、六世紀中葉から八世紀中葉にかけて北アジア・中央ユーラシアのモンゴル高原を中心に勢力をほこった古代トルコ系遊牧民の国家である。彼らは、その第二王朝にあたる突厥第二可汗国時代（六八二―七四四年）、彼らみずからの文字・突厥文字で、彼らみずからの言語・古代トルコ語を石碑に刻み込んだ。これが草原遊牧民に初めて誕生した独自の文字史料・突厥碑文である。かかる先行する遊牧国家と一線を画す突厥の研究には、文献史料の読解のみならず、考古遺物の分析やモンゴル現地におけるフィールド調査が不可欠である。

というのも、突厥碑文の多くがユーラシア内陸部の草原地帯に散在する遺跡に伴って発見されてきたからである。十九世紀末における突厥文字・古代トルコ語解読のキーストーンとなった史料群「オルホン碑文」も闕特勤、毗伽可汗等の王族が追悼されたホシヨーツアイダム（Xeuuec Iatram）遺跡に残されていたのであり、ロシア、フィンランド等の探検隊が現地で資料収集をおこない、それらが各国に将来されて研究に供されたものであった。また、碑文の発見や解読から一世紀以上が経過するが、今日までの間、モンゴルをはじめとする草原世界から幾多の興味深い物質資料が発現している。例えば、石人と呼ばれる石製人物像のように、文献史料の記述と比較参照が可能な遺物も現存し、古代トルコ系遊牧民の文化・習慣を知る手掛かりになっている。

〔表〕 2019年度調査行程表

7月調査：JP17H00938「モンゴル高原史の「空白期」の解明を目指した異分野融合研究」（研究代表者：新潟大学・白石典之）による、モンゴル国ヘンティ県博物館のフルネー（Л. Бүрэнгэс）調査員、オノロー（Б. Онорбаяр）調査員との合同調査		
日程	経路	調査遺跡・遺物
7/25（木）	ウランバートル市（Улаанбаатар хот）→ヘンティ県（Хэнтий аймаг）オンドルハーン市（Өндөрхаан хот）	
7/26（金）	→ボル＝オンドル郡（Бор-Өндөр сум）	①タリン＝ホシヨー（Талын Хошиё）石像の採掘調査〔第一節〕
7/27（土）	→デルゲルハーン郡（Дэлгэрхаан сум）	②ハヤー＝ホダック（Хаяа худаг）遺跡、③グン＝ブルド（Гүн бүрд）遺跡、④モンゴル帝国時代のアウラガ（Аварга）遺跡
7/28（日）	→バイン＝アダラガ郡（Баян-Адарга сум）	⑤ヘルレン郡（Хэрлэн сум）の石人墓群の踏査
7/29（月）	→オンドルハーン市	⑥匈奴時代のドールリッグ＝ナルス（Дууриг нарс）遺跡を見学
7/30（火）	→ウランバートル市	⑦ヘンティ県立博物館を見学
9月調査：JP18H00726「モンゴル帝国時代の仏像新発見に伴う「草原のシルクロード」の拠点に関する総合的研究」（研究代表者：龍谷大学・村岡倫）による調査		
日程	経路	調査遺跡・遺物
9/4（水）	ウランバートル市→ナライハ（Налайх）	①バインツォクト（Баянцогт）遺跡でトニユクク碑文の調査〔第二節〕
9/5（木）	ウランバートル市→中央県（Төв аймаг）ルン郡（Лүн сум）	②ルン郡の中心街から西南15kmにある牧民の冬営地にて突厥文字銘文の採掘調査
9/6（金）	ウランバートル市	モンゴル国立大学で資料調査
11月調査：JSPS19H00535「前近代ユーラシア世界における広域諸帝国の総合的研究：移動する軍事力と政治社会」（研究代表者：東京大学・杉山清彦）による、国立科学アカデミー考古学研究所との合同調査、調査協力者：同考古学研究所フンドウ（Г.Лхүндэв）研究員		
日程	経路	調査遺跡・遺物
11/23（土）	ウランバートル市→中央県バインツァガーン郡（Баянцагаан сум）→ゴビ＝スンベル県（Говь-Сүмбэр аймаг）チョイル市（Чойр хот）	①バインツァガーン郡のタヒリン＝オンゴン（Тэхийлин Онгон）等で関連遺跡を調査〔第三節〕
11/24（日）	チョイル市→バインツァガーン郡→ウランバートル市	②バインツァガーン郡で関連遺跡を調査

〔地図〕 2019年度調査関連遺跡



中央ユーラシアにおける古代トルコ系遊牧国家の実態解明をめざす著者は、二〇〇三年以来、文献史料の読解だけではなく、物質資料の解析を企図して、南北モンゴルのフィールド調査に従事してきた。本稿は、二〇一九年度に実施した三次にわたるモンゴル国での現地調査〔表・地図〕で得られた、新たな情報や知見のなから、突厥可汗国に關わる三項目について報告するものである。

一 ボル・オンドル郡発現のタリン・ホシヨール石像

ヘンテイ^{タイマツク}県ボル・オンドル郡^{ボム}の中心地から西へ約一四・三五kmの草原〔北緯四六度一六分二三・三秒 東経一〇九度三六分三二・五秒〕で、タリン・ホシヨール (Talin Xeuuee) と呼ばれる石像を七月二十六日に調査した。ヘンテイとはモンゴル国の中東部から北辺にかけて聳える山脈の名であり、一三世紀に草原世界を統一しモンゴルを誕生させたチンギス・カンの故郷としても著名である。ボル・オンドル郡はこのヘンテイ県南辺の草原地帯に所在する。

このタリン・ホシヨール石像は、二〇一九年六月、モンゴル国国立科学アカデミー考古学研究所のムンフトルガ (P. Munkhyma) 氏らの研究グループによる報告書 (以下、TX)²⁾ が刊行されたばかりの遺物であった。石柱状の石像はもともと地面に倒され砂礫に埋もれていたようだが、周辺の牧民によって二〇一六年に再び草原に屹立させられて以来、同地で鉄柵に囲われて保護されている〔写真1〕。現地で計測した結果、石像をなす平たい石柱の地上高は三四三cmあり、幅は約五五cm。地中にはまだ六〇cmが埋まっているということで、全長四mにもおよぶ長大な石材を利用したものであった。

まず、この石柱の上端から三五cmにかけての表面に男性の顔面がレリーフされている〔写真2〕。残念ながら完存してはいない。頭部の左側から右目の上部にかけて断面が走っており、冠り物や頭髮の表現などがわからない。恐らくその彫刻後に破損したものでだろう。このレリーフは、目から鼻筋が連続して描かれており、草原世界の石人独特の

特徴を備えている。鼻の下には口髭を蓄えているが、摩滅のために口元の表現は判別し難い。また、顎の下には容器が描かれ、両手の十指でそれがしっかりと握られ保持されている様子が見てとれる。なお、著者は探拓を試みたが、上述のほかには人物像として服装や腰回り等の表現を確認することができなかった。

つぎに、上端から約八〇cm程の表面にタムガ（トルコ・モンゴル語で「印章」の意。ここでは遊牧民の紋章、族徴を指す）が四つ、幅約一cmで線刻されていた。碑面は四面ともに粗く削り出されて整形されたものと推測され、その後、顔面が彫刻されている正面のみはやや丁寧に仕上げられた感触がある。その他、左右側面と裏面には人為的な刻線を確認することはできなかった。

ところで、この石像のもとには一五〜二〇cm大に細かく砕かれた石が数十個散乱していた。それらのなかには表面が平らにされた上、人為的な刻線がほどこされたものもあり、数個集めてみると格子状の紋様を復元できる。これらは埋葬儀礼に伴う石槨（第三節を参照）の断片であった可能性がある。しかし、周囲はほぼ凹凸のない真つ平らな草原であり、牧民に聞き取り調査をおこないながら搜索をしたものの、遺跡らしき痕跡やその手掛かりを見つけることはできなかった。

それでは、ムンフトルガ氏らによる報告書の考察に従って、本石像の時代観と来歴を整理すると、①タリン・ホシヨール石像は突厥時代の遺跡に伴出する石製人物像「石人」に相当する遺物である「TX 八、一三頁」。②本石像の基材となっている石柱は、スフバートル県で発見されたドンゴインシレー（Донгойн Ширээ）遺跡を構成する一四本にも及ぶ石柱によく似ている。^③そのため、本石像もその遺跡が造営された七三五〜七四一年に彫刻され建てられたものと推測される「TX 一七、四八頁」。③一一個のタムガのほか、数文字の突厥文字が石柱の三面にわたって刻まれている（ただし判読不可）。そのうち正面に刻まれた最大のタムガは、東部モンゴルのドンゴインシレー遺跡にも同様の意匠がある。また、それは『唐会要』に伝えられている「賀魯」部（氏）のものと同様と類似しているため、本石像は突厥を構成する賀魯部出身の人物を記念するために建立された石碑であったと結論できる「TX 四〇―四七頁」、

ということである。

以上のように推論する報告書TXは、モンゴル国で発見され報告された各種の石人やタムガの実例を丁寧写真図版によって示している点で学術的に評価すべきものである。しかし、石像を突厥ないし突厥内の特定部族に結びつけたいがあまり、行論において障碍となる要素を封じきれていない。

第一に、本石像の石材が再利用された可能性を排除している。同書は「TX 三六―四〇頁」、チヨイルの石人を挙げて、複数のタムガと突厥文字が石人に刻まれた例を示している。ところが、この石人は、突厥可汗国以前にまず人物像が彫刻された後、第二可汗国時代に再利用されてタムガや文字が刻まれたものである。⁽⁴⁾モンゴル高原には数本の石柱から構成される青銅器時代に由来する立石ないし鹿石も存在する〔写真3〕。⁽⁵⁾殊に稀な例であるが、フブスグル県のオラーン・オシグ遺跡には、鹿石の上端正面に顔面がレリーフされているもの（地上高三二八cm）⁽⁷⁾があり、本石像も元来はそのような遺物、ないしその再利用であった可能性もある。

また、両手で容器を捧げ持つ本石像の表現は、ヘンテイ県に散在し、突厥時代に先行するいくつかの石人のモチーフに類似している。そもそも突厥時代に比定される石人のサイズがほぼ等身大であるのに対して、本石像は非常に大きなものであると言わざるを得ない。すなわち突厥可汗国時代に作成された石人の形態から幾分外れる特徴を備えており、その成立年代には慎重な判断が必要かと思われる。

第二に、賀魯部のタムガに結び付ける推測の妥当性である。確かに唐王朝の制度や故事の沿革を記録した『唐会要』卷七十二・諸蕃馬印には、唐帝国に貢納されたウマの焼き印が羈縻支配をうけた部族ごとに記録されている。しかし、賀魯部の馬印と登録されているものは、本石像に刻まれたタムガの意匠とは一致しない。それでも同書「TX 四五―四六頁」では、類似する意匠をもとにその変遷過程を推定復元しているが、結果的に左右のモチーフが反転するような事態は想定し難い。そもそも、突厥の構成集団中、唯一タムガの比定に成功している阿史那（氏ノ部）のヤギ型タムガでさえも、『唐会要』に記録された意匠は、関連遺物に刻まれて伝存する形状と相当の懸隔がある。

これに関連して、同書「TX 一二頁」で本石像に刻まれていると主張されている、ヤギ型タムガについても著者は確認できなかったことを付言しておく。従つて、本石像を賀魯部あるいは突厥可汗国の王族・阿史那氏に結び付ける議論については賛同することができない。ただし、モンゴルで確認されたタムガを搜索し、本石像と同型のものを複数指摘している点は爾後の考察に資するであろう。

以上、タリン^{II}ホシヨ^I石像の年代観については、突厥第二可汗国のその他の関連遺跡に認められるタムガと共通性があるという点を現地調査で把握できたのみであった。報告書TXは一点一点のタムガが視認できたというが「一二頁」、著者はそのうち正面に刻まれた三点、残画が残る一点を含めれば合計四点しか検証できなかった。なにより、拓本には写しとれなかったが裏面以外の三面に見えたという「同、九頁」、突厥文字の痕跡をどこにも確認することができなかった。結論的に本石像のタムガについては第二可汗国時代に刻まれた蓋然性が高いものの、石像そのものの成立を突厥期に附会するには証拠不十分である。モンゴル国の東半部に所在する関連遺跡は最近になってよいよその報告数が増えつつあるが、類似する遺物との比較検討をしつつ慎重に成立過程を推論すべきであろう。

二 トニユクク碑文実見録

本節はウランバートルの東南六〇キロメートルに所在する、トニユククに献げられた突厥碑文について、実見調査で得られた知見の備忘録である。トニユククとは突厥第二可汗国の初代・エルテリシユ可汗(位六八二―六九一年)、二代・カプガン可汗(位六九一―七一六年)、三代・ビルゲ可汗(位七一六―七三四年)に仕えた武人宰相で、漢籍には噉欲谷ないし阿史徳元珍として伝えられる人物である。彼を追悼するバインツォクト(Baynıtsokht)遺跡には一続きの内容を持つ二本の石柱からなる突厥碑文が現存し、そのテキストは生前の武勲を彼自身が一人称で語るスタイルをとっている。彼の死後間もなく、七二五年頃に成立した、突厥碑文のなかでも最初期に建立されたものと推測され

ている。⁽¹⁰⁾

(二) 二行目冒頭の破損部分について

トニユクク碑文二二行目（第一碑文・東面四行目）の冒頭は碑面が破損している。先行する訳注研究はおおむねこの破損箇所を推定復元して翻訳を施している。しかし、前後の文脈や何度か反復される表現を比較参照すれば事足りるためか、その推論過程が示されていない。そこで、拓本の比較検討に基づき、また今般の検分を加味して、二二行目冒頭のテキストを読み解く過程を跡付けておきたい。

まず、一連の文脈を確認するため、二〇行目の途中から二二行目にかけて当該部分のテキストを示す。⁽¹¹⁾ 行論上、後述する先行研究による推定復元は省き、かつ懸案の二二行目冒頭のみは突厥文字の転写も付している。⁽¹²⁾

(20) ……《前略》…… : aṅaṅu sūlāmāsār : qač nāṅ ārsār : ol bizni

……もし彼（突厥の可汗）に向けて出軍しなければ、どんなことがあるうと、彼は私たちを、

(21) ////////////// [Y G](W) č(ō)slī(b)lī(ḡ)ar m s : Q č N ḡ r s r : ü l r t č i ü k ü k : ……

//////////////// ayručisi bilgä ämniš : qač nāṅ ārsār : ölürtäči kök : …… 《後略》……

……その顧問は賢いという。どんなことがあるうとも、必ずや（私たちを）殺すであろう。……

この部分には六八〇年代初頭、復興した突厥に敵対する三勢力の首脳たちの言葉が伝えられている。三者が連絡を取り合うなか、突厥の脅威が語られる文脈にある。ここで真っ先に想起されるのは、ほぼ同じ文言が二九―三〇行目（第一碑文・北面五―六行目）にも登場することである。

(29) ……《前略》…… yorināsār : bizni : qarvani alp ämniš : ayručisi : bilgä ämniš : qač nāṅ ārsār

……もし（出軍して）征かなければ、私たちを。その（突厥の）可汗は強く、彼の顧問は賢いという。どんなことがあるうとも、

(30) *bizni : ölürtäci kök : lemiš : …… 《後略》 ……*

私たちを彼らは必ずや殺すであろう、と（突騎施可汗が）言ったという。……

こちらは西突厥の後継国家である突騎施と唐帝国の使者往来の際に交わされた言葉である。この二九行目でも、二一行目と同様に、*bizni* 「私たちを」をうける述部が確認できない。これまでのところ、その理由を言外に示唆しているのはトムセン（V. Thomsen）氏やテキン（T. Tekin）氏であり、*ハッパ*に直前の二文——*qayani alp ärmis ayručisi bilgä ärmis* その可汗は強いという。彼の顧問は賢いという。——を、まるまる挿入して解釈するのである。⁽²³⁾

ちなみに、ここで両氏が挿入とみなしている双句は、懸案の二一行目以前にも登場する。すなわち、突厥の復興以前にモンゴル高原を支配していた九姓鉄勒可汗の発言である。

(6) …… 《前略》 …… *azqïña : türük : (10) yorïyur ärmis : qeyani : alp : ärmis : ayručisi : bilgä : ärmis : ol eki kişi : bär ärsär : sini taγyačïy : ölürtäci : ter män : …… 《後略》 ……*

……わすかばかりの突厥が（独立し）歩み始めているという。（しかし）その可汗は強く、彼の顧問は賢いという。（それ故）もしその二人の人間がいれば、あなたを、（すなわち）唐を彼らは殺すだろう、と私（九姓鉄勒可汗）は言っ。……

この一〇行目（第一碑文・南面三行目）の双句は、この碑文上での初出であるが、引用した通り、前後の文章は省略されることなく、完結している。こちらを見ると、まったくの挿入句というアイデアには違和感がある。むしろ、文章をたどれば、述部となる *ölürtäci* が省略されていると考えるべきではないだろうか。そもそもトニユクク碑文は *ölürtäci* が頻出するテキストであることを念頭に置くべきである。この一語は当該の二一行目と三〇行目のほか、一〇行目（第一碑文・南面三行目）に二回、二一行目（第一碑文・南面四行目）に一回、先行して刻まれている。かかる本碑文での用例に即せば、*ölürtäci* が碑文中で省略されたものとみる方が自然であろう。

ところで、同じテキストが記されている関特勤・毗伽可汗兩碑文の並行部分を比べると、先行して建立された関特

勅碑には刻まれていなかった単語が、数年後の毗伽可汗碑文では正しく刻まれている例がある。例えば、闕特勤碑文・東面五行目には見えず、毗伽可汗碑文・東面六行目に現れる *arṃis* など⁽¹⁹⁾で、これは同時代の碑刻者間の修訂を示唆するものである。このような例に鑑みれば、トニユクク碑文の当該部分についても、ただ単に *ölüräci* を記し忘れただけの可能性があるかも知れない。しかし、二〇行目と二九行目の連続する二カ所で立て続けに忘れられたとは考え難く、やはり繰り返し返される述部の省略と見るべきである。

その上で、二九行目の実際の碑面において、*qayani alp ärmis* を綴る最初の文字 *Q* から、*ayručisi* の *ç* の文字までを計測してみると二四 cm あった。これに対して、二二行目は冒頭が一〇数文字程度欠けているが、これも現地で見測してみると、行頭から明確に判読できる *ç* の文字まで二五 cm であつた。二二行目の破損部分には *qayani alp ärmis* の一文、すなわち突厥文字で九文字がまるまる収まる寸法である。そして、誤差はわずか 1 cm で、その他の語が復元される可能性はない。

従って、トニユクク碑文の二〇～二二行目は以下のように再建し、翻訳することができる。

(20) …… 《前略》 …… : *aṅaru süämäsär : qač nān ärsär : ol bizni <ölüräci>*
……もし彼(突厥の可汗)に向けて出軍しなければ、どんなことがあると、彼は私たちを(殺すだろう)。

(21) *qayani alp ärmis ayručisi biḡä ärmis : qač nān ärsär : ölüräci kök : ……* 《後略》 ……

その(突厥の)可汗は強く、彼の顧問は賢いという。(それ故)どんなことがあると、彼らは(私たちを)必ずや殺すであろう。……

また、二九行目の該当部も以下のようにテキストを復元できる。

(29) …… 《前略》 …… *yorṃasär : bizni <ölüräci> : qayani alp ärmis : ayručisi : biḡä ärmis : qač nān ärsär*
……もし(出軍して)征かなければ、私たちを(彼らは殺すだろう)。その(突厥の)可汗は強く、彼の顧問は賢いという。(それ故)どんなことがあると、

(30) *bizni : öljüräci kök : temis : ……* 《後略》……

私たちを彼らは必ずや殺すであろう、と（突騎施可汗が）言ったという。……

なお、〈〉は原石には刻まれていないが、省略があるとみなして補った語句とその翻訳であることを示している。

(二) 五二行目の定型句について

トニユクク碑文の五二行目（第二碑文・東面二行目）には、ある定型句が読みとれる。

(51) …… 《前略》 …… *tün udünäü* (52) *kinüz öljünäü : qizil qanım töküli : qara tärim yügürü : işig küçüg : eki berün ök : ……* 《後略》

……夜、寝ずに、昼、腰を落ち着かせることなく、私の赤い血が流れ、私の黒い汗がしたたる（まで）、私は労力と能力を二つながらを（可汗に）献げ（与え）たのであった。……

すなわち *işig küçüg ber-* という表現である。*iş* は古代トルコ語で「仕事、労働」を意味し、*küç* は「力」を意味する名詞である¹⁸。そして、これら二つにそれぞれ対格の接尾辞（-g）がつき、*ber-*「与える」という動詞に係っている。これは、トニユクク碑文だけでなく、その他の突厥碑文にも散見され、権力者／支配者に臣従していること／奉仕していることを示す文言として理解されている¹⁹。

先行研究では、ラムステッド (G. J. Ramstedt) 氏がラドロフ (W. Radloff) 氏のテキストを *işig küçüg berün ök* と修訂して以来²⁰、この読みが百年以上そのまま継承されてきた。しかし、*berün* と再建すべき部分の直前を大阪大学蔵拓本で精査したところ、突厥文字で *𐰽𐰺𐰍* の残画を確認することができた。さらに今回の調査で原石を観察したところ、文字にわずかな損傷はあるものの確と *𐰽𐰺𐰍* の二文字を判読できた。引用テキストに示したように、これらから *eki* の一語——数詞の「二」——を再建できる。

つまり、五二行目は、トニユククが君主たる可汗に対して、みずからの労力と能力の二つながらを献げたというの

である。iig kütig ber-という定型句が一般的であるが、ここでは動詞の前に ok を、さらに強調の分詞 ok を接尾辞の後に刻むことよって、トニユククの献身的な活躍、可汗への奉仕が一層際立つ表現に仕立てられている。

一三 バインツアガン郡の石槨遺跡

ウランバートルから東南に約一〇〇km、中央^トバインツアガン郡で石槨を伴う遺跡が新たに確認された。これは、郡内の悉皆調査で発見されたものであり、二〇一八年に提出されたモンゴル国国立科学アカデミー歴史・考古学研究所の報告書⁽²⁾に記載がある。著者は七月調査の際、ヘンティ県で匈奴時代の遺跡を発掘中のエレグゼン(Л. Эрэгзэн、上記悉皆調査の責任者の一人で、現在、国立科学アカデミー考古学研究所長)氏から情報提供をうけ、同年十一月にバインツアガン郡の踏査に漕ぎ着けることができた。

この遺跡は、郡の中心地から北東三・六kmのタヒリン^(Тайлин Онгон)と呼ばれる草原に所在している〔北緯四六度四七分四八二三秒 東経一〇七度一〇分〇五・九秒〕。この草原は西北方面に山を控えているため、所在地一帯は東方に向かってなだらかに傾斜していて、遺跡自体は丘陵地帯の中腹にあたる。そこから北上すると左手、西側に牧民の冬営地や家畜囲いの石積みが点在している。

こうしたほぼ平らな草原に一辺約二五mの正方形のマウンドが構築されていた痕跡を、現地に立つて見てようやくわずかに認識できる。現在、およそ五〜六m幅、高さ数十cmほどの土盛りが遺跡の中心部分を囲んでいる。そして、このマウンド内にはほぼ畳大の四枚の板石が現存している〔写真4〕⁽²⁾。そのうち三枚が遺跡の中心にある。二枚が地面にささったまま(恐らく原位置のまま)外側に傾き、その側に一枚が掘り起こされて倒れている。そして、これら中央の三枚から約六m北に残りのもう一枚が倒れている。これら石槨と呼ばれる板石は、石棺ないし通称サルコフアガス(sarcophagus)ともいい、突厥の王族、ないしそれに準ずるクラスの有力者の遺跡に見られるものである。ちなみ

に前節でとりあげたトニユククの遺跡にも花模様線刻された石槨が現存している。

さて、このような石槨は、死者を悼む酒宴などを開催する場所、すなわち追悼遺跡を構成する遺物であるという説が有力である。その一方で、火葬した遺灰を納めるための石囲いとみなす説もある⁽²³⁾。いずれにせよ、石槨は突厥可汗国時代の遺跡に集中して見られ、時代判定の指標になっている。つまり、文献史料との比較検討が可能な遺物なのであり、古代トルコ系遊牧民の埋葬儀礼や墓葬文化をうかがい知るための手掛かりとなっている。

ところで、この遺跡の石槨のうち、マウンド内のやや北に離れて倒れていた石槨の表面には鳳凰の線刻画がほどこされていた〔写真5〕。その他の遺跡での在証例と同様に、四辺を縁取るように長方形の界線が引かれている。そして、当該遺跡のこの一枚では、その外側には花紋の装飾が、その内側に装飾とともに羽を広げた鳳凰が左右対称に描かれている。残念ながら向かって右側の一羽は表面に損傷があり、板石自体も割れているために文様がほぼ真つ二つに割かれている状態である。

鳳凰文の石槨はこれまでも数点の实例が報告されている。突厥の王族である阿史那氏に由来するホシヨールツァイダムの第四遺跡の石槨〔写真6〕や、中央県のイフーホシヨート (IX Xeluen) 遺跡の石槨断片である。前者は、七三一年、七三四年に没した闕特勤、毗伽可汗を祀る遺跡の北一・二km程に所在する。碑文が伴出していないために詳細は不明ながら、バルバル石列⁽²⁴⁾も備えていることから、有力な王族が被葬者であることは間違いない。後者の遺跡には複数の石人や石獅子、バルバル等の遺物が現存するほか、キュリリチヨルという人物に献げられた突厥碑文も伴出している。顕彰された彼の生前の活躍や、チヨルという部族長が帯びる古代トルコの称号に鑑みれば、突厥の支配層に属する貴人と判断してよい⁽²⁵⁾。

そのほか、遺跡のマウンドをなす東側の土盛りのはほ中心に数十cm高の立石があった。これを東の方角にたどると一五〇m、合計八本の列石が現存している。そのうちの一つにはタムガ状の文様が刻まれていた。このバルバル石列の存在に照らしても、当該遺跡の被葬者が突厥の貴人層に属していたことは間違いないであろう。

以上、現存する石櫛の存在から判断して、本遺跡は突厥時代に造営されたものと言える。その年代決定を精確に行い、遺跡が成立した歴史的背景を問うためには、さらに石櫛やバルバルを精査するだけでなく、遺跡全体を検討する作業が必要不可欠である。場合によっては、発掘調査や地中探査が期され、更なる関連遺物の発見も俟たれるところである。⁽²⁷⁾ また、将来に向けて修復・保存対策も喫緊の課題と言えよう。

むすびにかえて

従来、突厥の遺跡と言えば、モンゴル国中西部に位置するハンガイ山脈の森林草原に分布するものであり、碑文史料の数量もハンガイ山中——突厥の聖地、所謂「オテユケン山」⁽²⁸⁾——から発見されたものが圧倒している。しかし近年、本稿で触れたドンゴインシレー、ハヤーホダック、ゲンブルドなど、モンゴル国の東半でも突厥に関連する遺跡が報告されるようになった。モンゴル国中東部に所在するトニユククの遺跡も含め、突厥の左翼、すなわち東部領域の実態が解明されれば、既存のオルホン碑文の記述にも再検討が必要になってこよう。

著者は以前、南北モンゴルの古地名の比定を試み、突厥第二可汗国の本拠地を検討したが、モンゴル高原における東部領域の詳細が更なる史資料をもつて裏付けられるのであれば、ゴビ以南の拠点である「黒沙」^{カラクム}の地政学的比重がさらに高まるものと予想される。本報告で紹介した史資料もその手掛かりの一部であるが、今後も現地モンゴルの研究機関と調整をはかり、文献歴史学の視点のみならず考古学の視点からも実証研究の推進を試みる次第である。

【付記】 本稿はJSPS科研費 JP17H00938・JP18H00726・JP19H00535の助成を受けたものである。

〔註〕

- (1) 北アジア・中央ユーラシア史における突厥可汗国ならびに遊牧民の文字使用の意義については、拙稿「突厥碑文から見るトルコ人とソグド人」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交流』（アジア遊学一七五）勉誠出版、二〇一四年、一九八―二一六頁、で概観している。
- (2) P. Мөнхтүлгэ, Г. Бүрэнтөгс, Б. Арваяжав, Тилин Хөшөөний тахилгын онгон, Улаанбаатар, 2019.
- (3) С. Б. Цогтбаатар, Н. Эрдэнэ-Очир, Т. Осав, Г. Дхүндэв, Ш. Сайто, В. Багдалай, Э. Амарболд, Г. Ангаралдлооен, “Донгойн ширээ”-ний дурсгалын археологийн судалгаа: «Дорнод Монголын эрмийн Гүрээийн үеийн түүх, археологийн судалгаагад төсвийн 2015–2016 оны магилгаа судалгааны үр дүн, Улаанбаатар, Institute of History and Archaeology, Mongolian Academy of Sciences & Osaka University, Japan, 2017.
- (4) チョイル碑文の先行研究ならびに銘文の読み直しについては、拙稿「突厥チョイル碑文再考」『内陸アジア史研究』二四、二〇〇九年、一―二四頁、を参照されたい。
- (5) 中央ユーラシア草原における青銅器時代の遺跡については、以下の概説「八六一―九六頁」を見よ。藤川繁彦（編）『中央ユーラシアの考古学』（世界の考古学⑥）同成社、一九九九年。
- (6) バルタスタイ（Baltaстай）遺跡は、北緯四七度〇〇分〇一分・七秒東経一〇六度五九分四〇・四秒、に所在する鹿石群である〔本稿、註21〕。
- (7) この鹿石の外形については、林俊雄『ユーラシアの石人』（ユーラシア考古学選書）雄山閣、二〇〇五年、口絵写真、鹿石二、を参照のこと。
- (8) С. Соёлын өвийн төв, Монгол нутаг дахь түүх, соёлын үн хөдөлгөөн дурсгал, I боть, Хэнтий аймга, Улаанбаатар, 2008. 林俊雄「モンゴリアの石人」『国立民族学博物館研究報告』二二―一、一九九六年、一七七一―二八三頁。特に後者の図版XII-13, 14が示す石人は典型例である〔二七、二八一頁〕。

(9) 例えば、二〇一七年から翌年にかけて、ヘンティ県デルゲルハーン郡でモンゴル・トルコの共同学術調査が実施され、郡内のハヤールホダック遺跡、グンニブルド遺跡が発掘された。いずれも石槨と石人を伴う突厥時代の遺跡であることが判明している。Ср. Ц. Оубатар, Ч. Баяндэлгэр, Ц. Энхбаяр, *Монголын Үндэстний үзэвч болон Олон Улсын Түрэг Академийн хамтарсан археологийн судалгааны ажлын тайлан*, Улаанбаатар, Монголын Үндэстний музей, 2018.

(10) 当該碑文の研究史ならびに遺跡の概観については、拙稿「トニユクク碑文研究史概論」森安孝夫（編）『シルクロードと世界史』大阪大学二一世紀COEプログラム「インターフュエイスの人文学」、二〇〇三年、一一三—一二九頁、を参照されたい。また、碑文全体の内容構成は、拙稿「突厥トニユクク碑文節記——斥候か逃亡者か——」『待兼山論叢（史学篇）』四二、二〇〇八年、六八頁で一覽できる。なお、これから本稿で引用する同碑二九行目と一〇行目、五二行目に前後するテキストは、この「鈴木二〇〇八」の六四—六六頁、五八—六〇頁、六九頁で示している。

(11) 原則的に、突厥碑文のテキストはローマ字による再建（Transcription）形で掲載し、斜体で残画が見える文字の再建を、太字で推定復元を、下線で転写・翻字（Transliteration）の際に表記されない母音類を示す。／／は文字の痕跡は確認できるものの、判読不能な部分である。スラッシュの数は相当する文字数に対応している。拙訳中の（ ）は著者が意味を補った部分であり、「」は文脈等をもとに推定復元した部分に対応する。突厥文字の転写と再建については、前掲「鈴木二〇一四」に掲載した文字表「二一—頁、図七」に準拠した。なお、テキストの底本には大阪大学所蔵の拓本を使用した。

(12) 突厥文字の転写・翻字については、（ ）で残画から推定される文字を、「」で文脈等から推定復元される文字を示した。／／については、前注における再建形での扱いに従う。

(13) V. Thomsen, Trns. by H. H. Schaefer, "Altürkische Inschriften aus der Mongolei," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 78 (Neue Folge 3-2), p. 165; T. Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*. (Uralic and Altaic Series 69), Bloomington / The Hague, 1968, pp. 250-251, pp. 286-287.

(14) マロフ氏は二〇、二九行目に、どのような古代トルコ語の動詞を想定したかは不明ながら、「打ち負かすだろう」と翻訳を付して

- おり、bizni の述部が省略されていたと推定される。С. Е. Маглов, *Памятники древнетюркской письменности. Тексты и исследования*. Москва / Ленинград, 1951, p. 67.
- (15) この一一行目の ölitäci にのみ、末尾に k の文字が付記されている点が特徴的である。テキン氏に従い、ölitäci-k と再建し、k を強調の分詞 kök (または ok) が短縮されたものとみなす [前掲] Tekin, op. cit., pp. 172-173]。
- (16) 両碑文の並行部分にこうでは、W. Radloff, *Atlas der Alterthümer der Mongolei. Arbeiten der Orchon-Expedition. (Mittheilung der Orientalischen Gesellschaft)*, 3. Lieferung, 1896 に掲載の翻字テキスト (Taf. III-CIV) 等七一覧を参照。Cf. D. Vasiliev *et al. (eds.), Orkhon. The Atlas of Historical Works in Mongolia. (Orkhon. Mongolian Tarikh Eserleri Atlas)*, Ankara, 1995. また、両碑文テキストを並列させて訳出する、小野川秀美「突厥碑文訳註」『満蒙史論叢』四、一九四三年、二四九―四二五頁、も参考になる。
- (17) Cf. Li Yong-Song, “On İKIZLKAM:YÖKÜL:KRAAltı:uYğrı in the 52nd Line of the Toñuquq Inscription”, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 168, 2018, pp. 133-149.
- (18) G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Typticenth-Century Turkish*, Oxford, 1972, p. 254, p. 693.
- (19) Naive Şirin Uzer, *Kökünk Öitiken Uygur Kağınlığı Yazılıları – Söz Varlığı İncelemesi*, Könya, 2009, p. 296.
- (20) G. J. Ramstedt, “Zwei uigurische Runenschriften in der Nord-Mongolei”, *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 30-3, 1913, p. 50. なお、ラドロフ氏のテキストは行の数え方が異なるため、当該箇所については五三行目の扱いとなっている。W. Radloff, *Die Alttyrkischen Inschriften der Mongolei*, Zweite Folge, St. Petersburg, 1899, pp. 22-23.
- (21) Г. Эрэгзэн, С. Энхболд, П. Алдармөнх, *Төв аймгийн Ванцангаан сумын нунга “Хүйсийн Эгээр”-ийн дурсгалт газар сэжигдэсэн хэргийн шинжилгээний ангилал: матлага, хайгуур судалгааны сэжиг тайлал*, “Монгол-Солонгосын соёлын өвийн судалгаа, шинжилгээ” төсөл, Улаанбаатар, 2018. 当該遺跡は、バインソアガン郡の遺跡リスト No.1 にあたる [ibid., p. 63, p. 92]。なお、本稿にに掲載した [写真 6] のバルタスタイ遺跡はその No.79 として登記されている [ibid., p. 79, p. 103]。
- (22) 石槨の計測値は、東にあるものから時計回りに、二二八×八五×一八cm (地面に一部が埋まって傾いている状態)、二二八×

【写真1】 タリン=ホショー石像 [2019年7月26日 著者撮影]



【写真2】 タリン=ホショー石像のレリーフとタムガ [2019年7月26日 著者撮影]



[写真3] バルタスタイ遺跡 [2019年11月23日 著者撮影]



[写真4] バインツァガーン郡の石塚遺跡の残存状況 [2019年11月24日 著者撮影]



[写真5] タヒリン=オンゴン石槨の鳳凰文 [2019年11月24日 著者撮影]



[写真6] ホショー=ツアイダム第四遺跡の石槨 [2009年8月8日 著者撮影]

